**降誕節第６主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年２月４日**

**「同じ賜物」**

**ヨエル書３章１節**

**3:1 その後／わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し／老人は夢を見、若者は幻を見る。**

**使徒言行録10章44～48節**

**10:44 ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。**

 **10:45 割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。**

 **10:46 異邦人が異言を話し、また神を賛美しているのを、聞いたからである。そこでペトロは、**

 **10:47 「わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか」と言った。**

 **10:48 そして、イエス・キリストの名によって洗礼を受けるようにと、その人たちに命じた。それから、コルネリウスたちは、ペトロになお数日滞在するようにと願った。**

　**私たちは主日礼拝で使徒言行録から御言葉に耳を傾けています。特にここ３週間は異邦人コルネリウスの回心の物語から聞いています。異邦人コルネリウスと使徒ペトロ、神様はこの二人に分け隔てなく幻を示されました。その幻を見たコルネリスはペトロを自分の家に招き、招きに応えて家に来てくれたペトロに自分が見た幻を語りました。そしてペトロが語る神の言葉を一言も聞き漏らすまいと御言葉を求めていました。ペトロは神様の幻さらにはコルネリウスのそのような姿から、神様はユダヤ人も異邦人も分け隔てなく愛して下さる方であると悟りました。そしてコルネリウスにイエス・キリストの十字架と復活の福音を語りました。かつてペンテコステの時にユダヤ人たちに語ったのと同じ福音を語りました。イエスをキリスト、救い主であると信じる者はユダヤ人であろうと異邦人であろうと誰でも救われる、イエス・キリストは全ての人の救い主であることを語ったのです。**

**コルネリウスと親類と友人たちがペトロの語る福音に熱心に耳を傾けている様子が目に浮かびます。一言も聞き漏らすまいと耳を澄ませ、たとえわからないことがあってもひたすらに耳を傾けている姿です。**

**ペトロが熱心に福音を語る、コルネリウスたちが熱心に耳を傾ける、それを遮るものが現われました。それが何と聖霊です。ペトロの説教はまだ終わっていません。44節に「ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。」とあるとおりです。**

**「割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆」はと45節にあります。コルネリウスに招かれてヤッファからペトロと一緒に来た人たちのことです。彼らはユダヤ人で律法に従って割礼を受けています。でもそんなこと今さらここでわざわざ書かなくてもわかります。もうすでに23節で「ヤッファの兄弟」と記されています。それだけで彼らがユダヤ人キリスト者であることがわかります。それなのにあえてここで改めてユダヤ人であることを強調するかのように「割礼を受けている信者でペトロと一緒に来た人たちは皆」と記されてあります。**

**コルネリウスたちもここでなぜあえてという書き方がされています。「聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれる」と書かれています。「聖霊の賜物がコルネリウスたちの上に注がれ」と書けばいいものをあえて分け隔てをするかのように「異邦人の上に注がれ」と書かれているのです。さらに「異邦人が異言を話し、また神を讃美しているのを、聞いた」と続きます。ここでも異邦人と記されています。**

**ペトロたちはユダヤ人、コルネリスたちは異邦人、何かその違いを強調するかのような書き方がされているのです。それは更には「異邦人には聖霊の賜物は注がれるはずがない」「異邦人が異言を話し、神を讃美するなんてありえない」なにかそういったニュアンスさえ感じる文章です。**

**でもそれはまさにペトロたちが感じていたことなのです。「ユダヤ人でない異邦人に聖霊が降り、聖霊の賜物が注がれるなんてありえない。異邦人が異言を話し神様を讃美するなんてありえない」「私たちはユダヤ人、彼らは異邦人なのに」今まさにペトロたちは神様がユダヤ人も異邦人も分け隔てならない方である、同じ愛を注いで下さるお方であることをまざまざと見せつけられたのです。**

**そして「わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか」と言ってペトロは一緒に来たユダヤ人キリスト者たちに異邦人コルネリウスたちにイエス・キリストの名による洗礼を授けさせたのです。こうして異邦人コルネリウスたちはこののちに教会に認められた最初の異邦人キリスト者となったのです。**

**今日の説教題は「同じ賜物」としました。「同じ賜物」この言葉は今日の聖書箇所には出てきません。今日の箇所に出てくるのは「聖霊の賜物」です。ペトロはこののちエルサレム教会に帰ってコルネリウスたちの出来事を報告します。その最後11：17でこのように言っています。**

**「こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか。」**

**ペトロはここでコルネリウスたちが受けた神様からの賜物である聖霊の賜物を、私たちにも与えられた同じ賜物と表現しています。同じ賜物です。彼らは私たちと同じ賜物を与えられたのだ。彼らと私たちは同じなのだ。ペトロはここで同じであることを強調します。**

**「聖霊の賜物」と言ってもいいのに「同じ賜物」と同じであることを強調しているのです。**

**先ほどは、「割礼を受けている信者で」とか「異邦人が」とかあえてユダヤ人と異邦人は別と強調されている書き方をされていると申しました。それがユダヤ人ペトロたちの正直な思いだからです。でも聖霊の賜物を受け、異言を語り神様を讃美するコルネリウスたちの姿をまじまじと見せつけられたペトロたちは、神様はユダヤ人も異邦人も分け隔てせずに同じ愛を注いで下さることをより強く実感させられたのです。だからこそ、イエス・キリストの名による同じ洗礼を授けたのです。自分たちが受けたのと同じ洗礼を授けたのです。そうして「同じ賜物」を受けたと同じであることを強調するように変えられたのです。**

**ペトロが教会に「同じ賜物」と報告する「聖霊の賜物」とはいったい何でしょうか。それは一言で言うと「イエスはキリストである、救い主であると告白することができる信仰」のことです。ローマの信徒への手紙12章3節にこのように記されています。「聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。」**

**イエスが主である、イエスがキリストであると告白できるのは聖霊の賜物なのです。聖霊の賜物が注がれた異邦人コルネリウスたちが、「イエスは主である、キリストである、救い主である」と告白したのです。それだけでなく、コルネリウスたちは異言を話します。この異言とは何かわけのわからない言葉ということではなく、他の国の言葉でイエスは主であると告白し、イエス様の十字架と復活の出来事という神様の大きな愛の業を語ったのでしょう。そして、イエス様の十字架の死と復活によって罪を赦して下さり大きな愛を示して下さった神様を讃美したのでしょう。それはまさにかつてペンテコステの日にペトロたちに起こったのと「同じ」ことが今まさに目の前で起きたのです。**

**ユダヤ人と異邦人、同じ賜物が与えられて、同じ主を信じる者として、同じ信仰の告白をし、同じ福音を語り、同じ讃美をする。同じ主の恵みに預かるのです。これって教会の姿だと思います。**

**そこで注目したいのが最後の48節の「それから」以降の言葉です。**

**「それから、コルネリウスたちは、ペトロになお数日滞在するようにと願った。」**

**「まあまあ、せっかくヤッファからカイサリアまで遠いところを来て下さったのだから、ゆっくりとしていってください」とのコルネリウスたちのおもてなしの言葉です。もしペトロがエルサレムに帰ることを急ぐなら断ったでしょう。そして、もしペトロたちユダヤ人の隔ての壁がまだあるなら洗礼を受けキリスト者となったコルネリウスであっても異邦人は異邦人に違いないから彼らとの交わりを断ったでしょう。でもペトロはそうしなかった。コルネリウスの申し出を受け入れたのです。それはペトロたちのユダヤ人の隔ての壁は完全に壊されたのです。同じ聖霊の賜物が与えられたことによってユダヤ人と異邦人を分け隔てる隔ての壁は完全に壊されて、コルネリウスたちのさらなる滞在の申し出に応えたのです。**

**コルネリウスたちと一緒に食事をし、恐らく先ほど中断されたイエス・キリストの福音をさらに語り、御言葉の恵みを共に味い、共に讃美をし、共に祈ったのでしょう。もはやそこにはユダヤ人も異邦人もありません。あるのは主にある教会の交わりです。御言葉を共に味わい、食卓の恵みを共にし、共に救われた喜びを分かち合い、讃美をし、共に祈るのです。そこに教会の喜びの交わりが生まれたのです。**

**私たちも「同じ賜物」が与えられて、イエスは主であると同じ信仰の告白をし、御言葉を共に味わい、食卓の恵みを共にし、共に救われた喜びを分かち合い、讃美をし、共に祈る教会の豊かな交わりが与えられています。私たち一人一人の顔も違いますし、性格も違います。考え方も違えば、生まれたところも、住んでいるところも違います。その違いを数え上げればきりがないでしょう。そしてもしその違いを強調するならば、お互いに隔ての壁を作ってしまうことになり、教会はバラバラになってしまうでしょう。それはどこの教会も同じです。**

**ユダヤ人はユダヤ人です。異邦人は異邦人です。どこまでいっても違いは違いです。あなたはあなたです。わたしはわたしです。どこまでいっても違う人です。けれどもその異なる人々が同じ賜物である聖霊を賜物を受けて、その違いを認めつつ、同じ主を告白して信仰の交わり、教会の交わりが与えられているのです。**

**この後私たちは共に聖餐の恵みに預かります。聖餐式の式文の序詞の中でこのような言葉があります。**

**「キリストのからだと血とにあずかるとき、キリストはわたしたちのうちに親しく臨んでおられます。また、この恵みのしるしは、わたしたちすべてを主において一つにします。」**

**そうです。私たちは主において一つなのです。主の十字架によって一つとされている。この大きな恵みの中を私たちはこれからも感謝を持って共に歩んでいきましょう。**